



教育支援の 実践知

子ども・学校・家庭をつなぐ

監修

岡田 守弘

編集

日本学校心理士会神奈川支部



へるす出版

監 修

岡田 守弘

東京医療学院大学教授, 横浜国立大学名誉教授,
日本学校心理士会神奈川支部特別顧問

編集委員長

田村 順一

日本学校心理士会神奈川支部副支部長

編集委員

齋藤 一政

幼児教育アカデミー教育相談主任, 教育コンサルタント,
日本学校心理士会神奈川支部事務局長

泉原 恭子

日本学校心理士会神奈川支部副支部長

芳川 玲子 ◎

星槎大学大学院教育実践研究科長・教育学研究科博士後期課程専任教授,
日本学校心理士会神奈川支部長

三藤 敏樹

白梅学園大学教職教育・研究センター教授,
日本学校心理士会神奈川支部事務局

◎は支部長

はじめに

学校を巡るさまざまな課題と日本学校心理士会神奈川支部25周年の歩み

今、学校は新しい時代への飛躍をしようとしています。

学校は、そこに通う児童生徒にとって、安心で安全な学びの場である必要があります。毎日が楽しく、新しい発見や学びの体験に満ちあふれ、生き生きと学校に通い、多くの友達と心を通わせて成長する場にすることが大人・社会の責務です。今の学校は、その責務を果たしているのでしょうか。

教員は時代に呼応する教育を模索し、さまざまに工夫して実践しようとしています。待遇改善なども検討されていますが、多様な業務に追われて長時間勤務が常態化し、児童生徒と向き合う時間さえ取れない現状は、正常な学校の姿とは思えません。教員を目指す学生も毎年少なくなり、次世代を担う子どもを育てるという魅力的かつ社会的な期待にこたえる職務であるはずの教職が、存続の危機にあるのです。

また、親たちはわが子の成長や将来に向けて、学校への期待が大きいがために、協力・協働ではなく、ともすれば一方的な要求になりがちとなることもあります。わが国の出生率が毎年下降の一途をたどっています。少子化を生んでいる要因は、経済的問題や結婚年齢の高年齢化など以外に、子どもをもち、育てることに魅力を感じられないという声も聞きます。

こうした背景にあって、現代の学校教育に随伴する諸課題をどのように乗り越えるかが問われているのです。

「日本学校心理士会」が発足したのは1997年、日本教育心理学会が「学校心理士資格認定委員会」を設置し、学校心理士の資格認定業務を開始したことに遡ります。それ以前から教育臨床の専門家などは、学校という独自の風土に応じた学校心理学の専門性に着目していました。1990年には「学校心理学実行委員会」が設置され、教員専修免許状における分野に「学校心理学」を付記するようにと文部科学省・都道府県教育委員会に働きかけていました。そして1997年に、教員ら実践家が学校心理学に基づく活動ができるよう、学校心理士資格認定が提唱され、「学校心理士」が誕生したのです。

1998年、神奈川地域に在住・在勤する学校心理士が70名を超えたことから、地域の学校教育と連携しつつ会員の研修・研究の場を広げるため、支部設立準備委員会が立ち上がり、1999年、横浜国立大学において第1回の総会・研修会が開催されました。そして2024年には日本学校心理士会神奈川支部設立25周年を迎えました。そこで、支部役員が中心となり執筆し、学校を巡るさまざまな課題に臨み、実践を中核として、これからの学校教育に貢献し得る書籍の刊行を企画しました。

テーマを「子ども・学校・家庭をつなぐ」とし、実践知に基づいて現状と課題、そして未来を見据えた対応に焦点を当てました。お読みいただき、苦戦しつつも成長し続けるすべての人々を支援するための一助としていただけると幸いです。

2025年7月吉日

岡田守弘

第1章

子どもを支える

- 01 子ども（児童生徒）を支えるとは 2
 - 02 小・中学校のソーシャル・スキル・トレーニング 10
 - 03 「子どもの社会的スキル横浜プログラム」の目指すもの 18
 - 04 高等学校における教育実践と課題 29
 - 05 子どものメンタルヘルス 39
 - 06 不登校児童生徒へのかかわり 52
 - 07 生命尊重の心を育むための「Think Globally」の視点に立った
「Act Locally」の実践 60
 - 08 不注意・多動傾向を示す児童生徒へのかかわり 66
- column 1 学級担任を支える特別支援教育コーディネーターに
必要とされるもの 17
- column 2 性の多様性について 28
- column 3 院内学級に通う児童生徒への支援 51
- column 4 児童心理治療施設の児童とのかかわり 59

第2章

教員・学校を支える

- 01 教員・学校への支援を俯瞰する 74
- 02 いじめ防止の学校・学級づくり 84
- 03 地震・津波による災害の危機対応 92
- 04 自殺企図・自傷傾向がある児童生徒の支援 102

- 05 教員のメンタルヘルス112
- 06 「発達支持的生徒指導」の実践としての授業づくり125
- column 5 高校の授業91
- column 6 コンサルテーション ―私の実践―100
- column 7 通級指導教室が救うもの111
- column 8 学校と医療機関の連携124

第3章

保護者・家庭を支える

- 01 家族支援の必要性134
- 02 相談ニーズの高くない保護者への支援140
- 03 教育支援センターでの保護者支援148
- 04 教育行政の立場からみる地域包括的支援システム158
- 05 外国につながりのある児童生徒の家庭への支援167
- 06 福祉と教育による協働（コラボレーション）の実践177
- column 9 PTAの現状と今後147
- column 10 保護者に寄り添う支援 ―作戦会議の視点―156
- column 11 地域による学校の活性化・安定化166
- column 12 虐待家庭へのかかわり186

おわりに188

索引189

おわりに

日本学校心理士会神奈川支部25周年の成果と次の世代に向けて

学校教育における今日的な諸課題の深刻さをみるにつけ、子ども、教員、保護者に対する学校心理学的な対応や、学校心理学の知見が、今ほど必要とされるときはありません。

本書が刊行されるにあたり、支部役員を中心に多くの皆さんの実践や、日常直面している諸問題を取り上げたうえで、それを学校心理学の視点で解説も加えていただきました。執筆いただいた方々にはここに厚くお礼を申し上げ、編集委員長として執筆者をまとめあげた田村順一先生の功績も併せて付記したいと思います。なお、本書の出版に向けて、へるす出版編集部的確なアドバイスと支援にも感謝しております。こうした実践を共有することが、多くの子どもたちのこれからの教育の課題解決に大いに役立つことを祈念します。

本書はまた、日本学校心理士会神奈川支部設立 25 周年を記念して企画されたものです。

思い返しますと、発足間もない学校心理士会の神奈川支部を設立したいと、われわれを横浜国立大学の研究室に集めたのは、前支部長であり、現在は特別顧問としてわれわれを導いてくださっている、岡田守弘先生でした。集められたのは、私も含めて大学院で岡田研究室に学んだ者たちや、心理学の知識だけではなく、子どもに対する教育のまなざしの大切さや、心そのものを学んだ者ばかりです。「関東岡田組」と冗談を言いながらも、岡田先生を中心に何より固い結束とチームワークで神奈川支部を支えてきたメンバーです。その後、学校心理士の増加に伴って所属地区が明確になり、現在では神奈川支部所属会員だけでも 350 人を優に超える大所帯となりました。学校心理士資格の更新ポイントとして使える研修会も年に 3 回開催し、最新の情報を会員向けに発信しています。

その支部が発足以来、25 年の長きにわたって一枚岩でやってこられたのも、岡田先生の人徳と熱意、それを慕う役員メンバーのおかげです。この場を借りて今一度、岡田先生と役員の皆さんに感謝の言葉を伝えたいと思います。

今学校は、さまざまな新しい支援が必要な状態になっていると思います。価値観の多様化、コロナ禍による人間関係構築の大きなダメージ、地域の教育力や家庭の教育力の低下などで、子どもが今までにない経験をしています。どのような状況に立ち至っても、子どもたちが安心して通え、未来の希望を育むことができるよう、学校は新しい教育に向かって脱皮する転機にさしかかっているかのようです。学校教育には、心の問題、学校心理学の視点が何より重要になっています。大切なことは、ほかのいろいろな専門家と一般の教員をつなぐ、心理学と教育の両者の視点に立てる、仲立ちとしての「学校心理士」の存在です。「学校心理士」に加え、今は「准学校心理士」という新たな資格認定が始まりました。これは大学生など若い、意欲ある人材に学校心理学の視点を学んでもらうための、いわば未来への布石です。多くの方々に本書を手にとっていただき、未来に向けた学校づくりに役立てていただきたいと思います。

今学校が直面するさまざまな課題と、それを解決するための努力の数々が、現場で模索する多くの方々の参考になれば幸いです。

2025 年 7 月吉日

大草正信